

第三章 中学生のころ

強い身体は生涯の財産

私が入学した滝野中学校は、加茂小学校と滝野南小学校の二つの小学校から生徒が集まってくる。生徒は百九十人余りで四クラスに分かれていた。小学生のときから、自転車で通学していたので、通学には困らないはずだが、かなり遠くなったので通学は、相変わらず身体の負担になった。

中学生になると部活動が始まる。放送部に入り、毎朝のBGMから連絡・告知放送、運動会などの諸行事ではBGMや案内、実況放送などを経験した。機械に強く、アンプの操作や修理が得意であった。

大人になってからよく酒の席で、「税理士になっていなかったら電気屋になっていた」と冗談を言っているが、部品を購入し、半田鋺を使ってアンプの修理からラジオの組み立てまでを行った。手先が器用で、興味が尽きなかった。

中学生になれば科目ごとに先生が変わる。好きな科目、得意な科目は、数学、理科、英語、国語の順であった。大西健之先生の理科、後藤正一先生の英語、竹内毅先生の国語の授業は印象に残っている。また、ノミ、カンナ、ノコギリなどを使って木工細工を行う職業科という科目があった。これらの道具は教材として購入していたので、この道具を使って自分の杖を作っていた。杉材の柔らかいものを使い楕円形の持ちやすい形にし、最後はサンドペーパーで磨いた。我ながら誇らしく思ったが、みんなには黙っていた。現在使っている杖は、中学校の同級生で、タンス職人になった田中峰男君が桜材で作ってくれた。

中学二年生のときに、大阪市立大学病院整形外科で、左右の脚長差を調整するための手術を受けた。普通に成長する左足の成長を止め、悪い右足の成長を促進するため、左足の膝の軟骨に金属のステップルを八本打ちこみ、右足の膝の軟骨にボルトを二本打ちこんだ。

田舎暮らしの私が、大阪の大学病院で手術を受けることになったのは次のご縁による。小学五年生の夏、小豆島において神戸YMCAの主催で行われていた「障害者のための余島キャンプ」に参加した。隊長は、神戸YMCAの今井鎮雄先生であり、後に国際ロータリーの理事を務めた方である。先生には、私が小野ロータリークラブの会長になったとき、いろいろご教示いただいた。

このキャンプに、大阪市立大学病院・整形外科の医師がボランティアで参加していた。当時、

大阪市立大学病院整形外科の主任教授は、大阪大学から大阪市立大学に移り、後に川崎医科大学の初代学長になった水野祥太郎という有名な先生であった。その先生の手術を受けようと父母が決めた。実際の執刀医は、キャンプにボランティアで参加されていた講師の木下先生であった。

当時は先端的手術であったそうだが、左足の成長が強く、ステップルが折れたので、大学入学後、再び大阪市立大学病院に入院してこのステップルを抜いた。今の左右の脚長差は七センチである。

手術後しばらくしてから、補装具なるものを作った。腰を幅の広い皮のベルトで縛り、そこを支点に、右足を金属のジョイントで上下に動かして、杖なしで歩くことができた。

しかし、補装具は重くて、中学生の体力では、腰から下に不自然な力がかかり、これに耐えられず、短い期間でやめてしまった。不自由な足でも、杖を持つてでも、自分の足で歩けることは素晴らしい。

中学三年生になると教室が二階になる。高い階段には辟易したが、時間をかけ、手摺を持つて昇降した。後に、滝野町の監査委員になって、この中学校の監査に行き「この階段には困ったが、そのお陰で今は手摺さえあれば二階でも三階でも上がれる。これは最高の訓練だった」と、ポツリと感想を述べた。

そのときの滝野中学校には、ポリオ後遺症の障害児が一人いて、その生徒のために八百万円もする昇降機を公費で購入していた。「これはよい措置ではない。一番適切な対処方法は、生徒や先生が、階段の昇降時に、それとなくその生徒の前後にいて、転げ落ちる危険から守ってやることだ。

中学生の頃は、身体づくりの時期であるので、苦勞して身体を鍛えなければならぬ。昇降機で楽するのは一時で、階段を上がれない不自由は生涯続く。全国どこへ行っても階段はある」と申し上げた。

居合わせた校長以下教育委員会の関係者は、誰も、一言も発言せず座が白けたが、これほど、正鵠を得た監査指摘はない。しかし今では、車いすを使用する生徒が一人もいない小中学校の二階建ての校舎にまでエレベーターがある。さすがに生徒は使っていない。

就学延期で、一年遅れて小学校に入ったので中学三年生になると、年齢が十六歳になり、原動機付き自転車運転免許がもらえた。自転車に補助エンジンがついたちやちなものであったが、中学生がエンジン付の自転車に乗って通学するのはいかにも異様であった。

ただ、セルモーターがついていなかったもので、エンジンがすぐに始動せず苦勞したことを覚えていた。

近年、メンテナンスをお願いしていた丸山自転車屋さんから「あんたの原付自転車の修理

には困った。翌日の通学までに間に合わすために夜中までかかって修理した」と聞かされた。

小学校から大学までの間に、子ども用自転車二台、原動機付き自転車三台、ホンダのスーパーカブ三台を乗換え、二十五歳のときに普通車の免許を取ってから現在まで、乗用車は十五台くらい乗り換えた。

自転車や乗用車は、生涯、私の足になり、ドアーツードアの生活を可能にしてくれた。原付も、スーパーカブも、乗用車も、足まわりは、左足仕様に改造してある。いつも最先端を走っていたから、販売店も修理屋さんもみんな私のために苦勞してくれた。

中学生の頃には生きる力の基本を学んだ。三年生の担任であった竹内毅先生からは、吉田兼好『徒然草』「百十九段・高名の木登り」の暗唱で「戒め」の教えを受けた「何事も調子に乗ってはいけない」「自重に自重を重ねよ」という教えのおかげで大きな過ちをしないですんだ。

内橋昭二先生の社会の授業のおかげで、新聞の社会、経済面を読み続けた。日経ビジネスはじめ経済誌、日経、朝日の日刊二紙を五十年間購読し、経済知識を磨き、小論を書いてきた。

後藤正一先生の英語の授業のおかげで、英語が得意になり、アメリカ、ヨーロッパ、カナダ、オーストラリア、アジアの国々を十数回旅行した。

藤原正己先生の音楽、芹生政夫先生の美術のおかげで及第点がもらえた。音楽、美術、体育は、全くダメで、ペーパーテストに救われた。右脳系は全くできないが、最低限の教養は身に

ついた。

体育の授業は、年中見学で、成績はいつも五点法の二、参加できる種目はゼロ、仕方がないから運動場を歩いていた。腕が強かったので鉄棒だけはできた。

大学では教養の体育が必須科目になっている。「君は競技ができないだろうから、審判をしなさい。できなければ、試合の点数板を書き入れなさい」と言われたが、そのどちらもできない。必須科目なのでこれを落とすと卒業できないが、出席して見学するだけで合格点をいただいた。

いつの時代でも、小中学校児童の教育に「健康体力づくり」は最大のテーマである。強い身体」は生涯の財産である。